

第 29 回西アジア発掘調査報告会の開催にあたって

日本西アジア考古学会会長 西秋 良宏

西アジア発掘報告会は、その前年の1月～12月に日本の研究者がおこなった西アジア現地調査の成果を速報することを目的としています。日本西アジア考古学会が開催している定例行事の一つで、1994年から毎年3月に実施しています。今年も開催の運びとなったことをたいへんうれしく思います。同時に、またしても開催にあたってコロナ禍を話題にすることをお許しください。これで三年連続です。

感染症拡大防止に協力すべく、2020年の第27回は誌上発表のみ、2021年の第28回はオンライン発表のみ、そして本年は会場発表とオンライン発表を組み合わせたハイブリッド方式での開催としました(2022年2月執筆時の予定)。得体の知れなかった新型コロナウイルスへの我々の対応が、おそろおそろではありますが、それとの共存へと変容しつつあることを如実に示すありようだと思います。また、昨年3月の報告会では現地調査をおこなったチームは片手に満たないほどでしかありませんでしたが、今年は10近くまで増えたようです。中にはオンライン技術を使ったりリモート調査をおこなったチームもあったと聞いています。コロナ禍前は毎年20以上の調査団が各地で活躍していたわけですから、そこまでには回復していませんが、西アジア考古学者もコロナとの共存を前提にさまざま手を尽くし対応がすすんでいるものと受け止めています。

コロナ禍による人々の行動変容、社会変化を見届けることは考古学者にとってたいへん勉強になるとかねがね考えています。たかが数年の変化ではありまじょうが、ふだん数百、数千年単位で社会の変化を論じている我々にとって、急激な社会の変化を身をもって経験することは研究に新たな深みを与えるに違いないからです。

ただ、今回の行動変容がどこに向かうかは別問題で、考古学において懸念がないわけではありません。大学ではリモート授業が増加しました。報道によれば、それに満足している学生が少なくないということです。先生方の講義の技術が向上したことが大きいと思いたいところですが、自宅や出先で学べること、つまり現場に足を運ばなくても知識が得られることの手軽さがデジタル技術を使いこなす若い人に歓迎されているのだとすれば、座学はともかく、実習が不可欠な考古学にとっては考えものです。机上の空論ならぬモニター上の空論を展開する考古学者ばかりが増えたら、それは困る。

西アジアに限らず、考古学において現地調査は格別の意味をもっています。いかにリモート

技術が発達しても、伝えるべき情報を生み出すのは現場であって、そこからどうやって情報を引き出すのかについて考古学者は腕を競っています。同時に、発掘現場は学生教育の場にもなってきました。コロナ禍で学生が西アジアの現場を体験する機会に空白が生じてしまっていることは、はなはだ遺憾なことです。これは事態の好転を待つしかない側面もあるのですが、発掘がどのようなものかを伝える努力は続けていかねばなりません。西アジア発掘報告会が一人でも多くの方々の目にふれ、発掘調査の魅力や必要性が理解される機会となることを強く望んでいます。

さて、第29回となる今回の報告会は広島市で開催する運びとなりました。研究者が集中する東京以外の地でおこなわれるのは初めてのことです。かねがね、他の地域でも開催したいという気持ちはもっていました。その呼びかけに真っ先に応じてくださったのが広島の会員のみなさんであったわけです。広島と言えば、広島大学は1970年代にイラン地方の考古学調査をおこない、新石器時代から鉄器時代にかけての研究ですぐれた成果をあげられた実績があります。2009年には広島大学で日本西アジア考古学会の第14回総大会を開催していただき、イラン調査資料を見学する機会を設けてくださいました。また、西アジアの文化遺産保護、シルクロードブームの牽引者であられた平山郁夫画伯の出身地であることもよく知られています。この報告会でも画伯の活動にちなんだ講演が企画されています。

古くからの伝統をご存知の方々がおられる地で、最新の西アジア考古学の調査成果を報告できますことは、意義深いことと思います。オンライン参加のみなさんともども、楽しんでいただければ幸いです。

末筆ではありますが、今回の報告会を組織された実行委員会(伊藤実委員長)はじめ、準備に尽力された多くの関係各位に厚く御礼申しあげる次第です。また、本報告会は令和3年度日本学術振興会科学研究費補助金による助成事業であることも記させていただきます。
